

明石

渋谷栄一訳

第一章 光る源氏の物語 須磨の嵐と神の導きの物語

「第一段 須磨の嵐続く」

依然として雨風が止まず、雷も鳴り静まらないで、数日がたった。ますます心細いこと、数限りなく、過去も未来も、悲しいお身の上で、気強くもお考えになることもできず、とうしよう。こうだからといって、都に帰るようなことも、まだ赦免がなくては、物笑いになることが増そう。やはり、ここより深い山を求めて、姿をくらましてしまおうか「とお思いになるにつけても、波風に脅かされてなど、人が言い伝えるようなこと、後世にまで、たいそう軽率な浮名を流してしまうことになる」とお迷いになる。

夢にも、まるで同じ恰好をした物ばかりが現れては現れて、お引き寄せ申すと御覧になる。雲の晴れ間もなく、明け暮らす日数が過ぎていくと、京の方面もますます気がかりになって、「こうしたまま身を滅ぼしてしまうのだらうか」と、心細くお思いになるが、頭をさし出すこともできない空の荒れ具合に、やって参る者もない。

二条院から、無理をしてみすばらしい姿で、ずぶ濡れになって参つたのだ。道ですれ違つても、人が何物かとさえ御覧じ分けられない、早速追い払ってしまうにちがいない賤しい男を、慕わしくしみじみとお感じになるのも、自分ながらもつたいたいなくも、卑屈になってしまった心の程を思わずにはられない。お手紙に、

「驚くほどの止むことのない日頃の天気、ますます空までが塞がってしまった心地がして、心の晴らしようがなく、須磨の浦ではどんなに激しく風が

吹いていることでしょう。心配で袖を涙で濡らしている今日このごろです。しみじみとした悲しい気持ちがいっぱい書き連ねてある。ますます涙があふれてしまいそうで、まっ暗になる気がなされる。

「京でも、この雨風は、不思議な天の啓示であると言って、仁王会などを催す予定だと噂していました。宮中に参内なさる上達部なども、まったく道路が塞がって、政道も途絶えております」

などと、はきはきともせず、たどたどしく話すが、京のこととお思いになると知りたくて、御前に召し出して、お尋ねあそばす。

「ただ、例によって雨が小止みなく降つて、風は時々吹き出して、数日来になりますのを、ただ事でないと思われているのです。まことにこのように、地の底に通るほどの雹が降り、雷の静まらないことはございませでした」などと、大変な様子で驚き脅えて畏まっている顔がともつらそうなのにつけても、心細さがつのるのだった。

「第二段 光る源氏の祈り」

「こつしながらこの世は滅びてしまふのであるつか」と思わずにはいらつやれないでいると、その翌日の明け方から、風が激しく吹き、潮が高く満ちきて、波の音の荒々しいこと、巖も山をも無くしてしまいそうである。雷の鳴りひらめく様子、さらに言いようがなく、さら、落ちてきた」と思われると、その場に居合わせた者でしつかりした人はいない。

「自分はどうのような罪を犯して、このような悲しい憂き目に遭つたのだらう。父母にも互いに顔を見ず、いとしい妻や子どもにも会えずに、死なねばならぬとは」と嘆く。君は、お心を静めて、どれほどの過失によって、この海辺に命を落とすというのか」と、気を強くお持ちになるが、ひどく脅え騒いでいるので、色とりどりの幣帛を奉らせなされて、

「住吉の神、この近辺一帯を、ご鎮護なさる。真に現世に迹を現しなさる神ならば、我らを助けたまえ」

と、数多くの大願を立てなさる。各自めいめいの命は、それはそれとして、このような方がまたとない例にお命を落としてしまいそうなのがひどく悲しい、心を奮い起こして、わずかに気を確かに持つている者は、わが

身に代えて、この御身ひとつをお救い申し上げよう」と、大声を上げて、声を合わせて仏、神をお祈り申し上げる。

「帝王の、深宮に育てられなさつて、さまざまな楽しみをほしいままになさつたが、深い御仁徳は、大八洲にあまねく、沈淪していた人々を数多く浮かび上がらせなされた。今、何の報いによつてか、こんなに非道な波風に溺れ死ななければならぬのか。天地の神々よ、ご判断ください。罪なくして罪に当たり、官職、爵位を剥奪され、家を離れ、都を去つて、日夜お心の安まる時なく、お嘆きになつていらつしやる上に、このような悲しい憂き目にまで遭い、命を失つてしまいそうになるのは、前世からの報いか、この世での犯しによるのかと、神、仏、確かにいらつしやるならば、この災いをお鎮めください」

と、お社の方を向いて、さまざま願を立てなさる。

また、海の中の龍王、八百万の神々に願をお立てさせになると、ますます雷が鳴り轟いて、いらつしやるご座所に続いている廊に落ちてきた。炎が燃え上がつて、廊は焼けてしまった。生きた心地もせず、皆が皆あわてふためく。後方にある大炊殿とおぼしい建物にお移し申して、上下なく人々が入り込んで、ひどく騒がしく泣き叫ぶ声、雷鳴にも負けぬ。空は黒墨を擦つたようで、日も暮れてしまった。

「第三段 嵐収まる」

だんだん風が弱まり、雨脚が衰え、星の光も見えるので、このご座所もひどく見慣れないのも、まことに恐れ多いので、寢殿にお戻りいただくとするが、

「焼け残つた所も気味が悪く、おおせいの人々が踏み荒らした上に、御簾などもみな吹き飛んでしまった」

「夜を明かしてからは」

とあれこれしている間に、君は御念誦を唱えながら、いろいろお考えめぐらしになるが、気持ちが悪く落ち着かない。

月が出て、潮が近くまで満ちてきた跡がはつきりと分かり、その後も依然として寄せては返す波の荒いのを、柴の戸を押し開けて、物思いに耽り

ながら眺めていらつしやる。この界限には、ものの道理をわきまえ、過去将来のことを判断して、あれこれとはつきりと理解する者もない。賤しい海人どもなどが、高貴な方のいらつしやるところといつて、集まつて参つて、お聞きになつても分からないようなことがらをぺちゃくちゃしゃべり合つているのも、ひどく珍しいことであるが、追い払うこともできない。

「この風が、今しばらく止まなかつたら、潮が上がつて来て、残るところなく攫われてしまったことでしょう。神のご加護は大変なものであつた」と言つたのを聞きになるのも、とても心細いといつたのでは言い足りないくらいである。

「海に鎮座します神の御加護がなかつたならば、潮の渦巻く遙か沖合に流されていたことであらう」

一日中、激しく物を煎り揉みしていた雷の騒ぎのために、そうはいつても、ひどくお疲れになつたので、思はずうとうとなさる。恐れ多いほど粗末なご座所なので、ちよつと寄り掛かつていらつしやる、故院が、まるで御生前おいであそばしたお姿のままお立ちになつて、

「どうして、このような見苦しい所にいるのだ」

と仰せになつて、お手を取つて引き立てなさる。

「住吉の神がお導きになるのに従つて、早く船出して、この浦を去りなさい」と仰せあそばす。とても嬉しくなつて、

「畏れ多い父上のお姿にお別れ申して以来、さまざま悲しいことばかり多くございますので、今はこの海辺に命を捨ててしまひましょうかしら」

と申し上げなさると、

「実にとんでもないことだ。これは、ちよつとしたことの報いである。朕は、在位中に、過失はなかつたけれど、知らず知らずのうちに犯した罪があつたので、その罪を償うのに暇がなくて、この世を顧みなかつたが、大変な難儀に苦しんでいるのを見ると、堪え難くて、海に入り渚に上がり、たいそう疲れたけれど、このような機会に、奏上しなければならぬことがあるので、急いで上るのだ」

と言つて、お立ち去りになつてしまった。

名残惜しく悲しくて、お供して参りたい」とお泣き入りになつて、お見上げなさると、人影もなく、月の面だけが耿耿として、夢とも思はず、お

姿が残つていらつしやるような気がして、空の雲がしみじみとたなびいていたのであつた。

ここ数年来、夢の中でもお会い申さず、恋しくお会いしたいお姿を、わずかな時間ではあるが、はつきりと拝見したお顔だけが、眼前にお浮かびになつて、自分がこのように悲しみを窮め尽くし、命を失いそうになつたのを、助けるために天翔つていらした」と、しみじみと有り難くお思ひになると、「よくぞこんな騒ぎもあつたものよ」と、夢の後も頼もしくうれしく思われなされること、限らない。

胸がぴたつと塞がつて、かえつてお心の迷ひに、現実の悲しいこともついで忘れ、夢の中でお返事をもう少し申し上げずに終わつてしまつたことと残念で、再びお見えにならうか」と、無理にお寝みになるが、さうばりお目も合わず、明け方になつてしまつた。

「第四段 明石入道の迎えの舟」

渚に小さい舟を寄せて、人が二、三人ほど、この旅のお館をめざして来る。何者だろうと尋ねると、

「明石の浦から、前の播磨守の新発意が、お舟支度して参上したのです。源少納言、伺候していらしたら、面会して事の子細を申し上げたい」

と言つ。良清、驚いて、

「入道は、あの国での知人として、長年互いに親しくお付き合ひしてきまつたが、私事で、いささか恨めしく思うことがございまして、特別の手紙でさえも交わさないうで、久しくなつておりましたが、この荒波に紛れて、何の用であらうか」

と言つて、不審がる。君が、お夢などもご連想なされることもあつて、「早く会え」とおつしやるので、舟まで行つて会つた。あれほど激しかった波風なのに、いつの間にか船出したのだらう」と、合点が行かず思つていた。

「去る上旬の日の夢に、異形のもの告げ知らせることがございしたので、信じがたいこととは存じましたが、十三日にあらたかな靈験を見せよう。舟の準備をして、必ず、この雨風が止んだら、この浦に寄せ着けよ」と、前もつて告げていたことがございしたので、試しに舟の用意をして待つて

おりましたところ、激しい雨、風、雷がそれと気づかせてくれましたので、異国の朝廷でも、夢を信じて国を助けた例が多くございしたので、お取り上げにならないにしても、この予告の日をやり過ぎず、この由をお知らせ申し上げましようと思つて、舟出しましたところ、不思議な風が細く吹いて、この浦に着きましたこと、ほんとうに神のお導きは間違ひがございませぬ。こちらにも、もしやお心あたりのこともございましてしようかと存じまして。大変に恐縮ですが、この由、お伝え申し上げてください」

と言つ。良清、こつそりとお伝え申し上げる。

君、お考えめぐらすと、夢や現実にいると穏やかでなく、ものさとしのようなことを、過去未来とお考え合わせになつて、

「世間の人々がこれを聞き伝えるような後世の非難も穏やかではないだろつことを恐れて、本当の神の助けであるのに、背いたものなら、またそれ以上、物笑ひを受けることになるだらうか。現実の世界の人の意向でさえ背くのは難しい。ちよつとしたことでも慎重にして、自分より年齢もまさるとか、もしくは爵位が高いとか、世間の信望がいま一段まさる人とかには、言葉に従つて、その意向を考え入れるべきである。謙虚に振る舞つて非難されることはない、昔、賢人も言い残していた。なるほど、このよつな命の極限まで辿り着き、この世にまたとないほどの困難の限りを体験し尽くした。今さら後世の悪評を避けたところで、たいしたこともあるまい。夢の中にも天帝のお導きがあつたのだから、また何を疑おつか」

と思ひになつて、お返事をおつしやる。

「知らない世界で、珍しい困難の極みに遭つてきたが、都の方からといつて、安否を尋ねて来る人もいない。ただ茫漠とした空の月と日の光だけを、故郷の友として眺めていますが、うれしい釣舟と思つぞ。あちらの浦で、静かに隠れていられる所がありますか」

とおつしやる。この上なく喜んで、お礼申し上げます。

「ともかくも、夜のすつかり明けない前にお舟にお乗りください」といふことで、いつもの側近の者だけ、四、五人ほど供にしてお乗りになつた。

例の不思議な風が吹き出してきて、飛ぶように明石にお着きになつた。わずか這つて行けそうな距離は時間もかからないとはいへ、やはり不思議に

まで思える風の動きである。

第二章 明石の君の物語 明石での新生活の物語

「第一段 明石入道の浜の館」

浜の様子は、なるほどまことに格別である。人が多く見える点だけが、ご希望に添わないのであつた。入道の所領している所々、海岸にも山蔭にも季節折々につけて、興趣をわかすにちがいない海辺の苫屋、勤行をして来世のことを思い澄ますにふさわしい山川のほとりに、蔽かな堂を建てて念仏三昧を行い、この世の生活には、秋の田の実を刈り収めて、余生を暮らすための稲の倉町が幾倉もなど、四季折々につけて、場所にふさわしい見所を多く集めている。

高潮を恐れて、近頃は、娘などは岡辺の家に移して住ませていたので、この海辺の館に気楽にお過ごになる。

舟からお車にお乗り移りになるころ、日がだんだん高くなって、ほのかに拝するやいなや、老いも忘れ、寿命も延びる心地がして、笑みを浮かべて、まずは住吉の神をとりあえず拝み申し上げる。月と日の光を手にお入れ申した心地がして、お世話申し上げること、こもつともである。

天然の景勝はいつまでもなく、こしらえた趣向、木立、立て石、前栽などの様子、何とも表現しがたい入江の水など、もし絵に描いたならば、修業の浅いような絵師ではとても描き尽くせまいと見える。数か月来の住まいよりは、この上なく明るく、好ましい感じがする。お部屋の飾りつけなど、立派にしてあつて、生活していた様子などは、なるほど都の高貴な方々の住居と少しも異ならず、優美で眩しいさまは、むしろ勝っているように見える。

「第二段 京への手紙」

少しお心が落ち着いて、京へのお手紙をお書き申し上げになる。参つて

いた使者は、現在、

「ひどい時に使いに立つて辛い思いをした」

と泣き沈んで、あの須磨に留まつていたのを召して、身にあまるほどの褒美を多く賜つて遣わす。親しいご祈祷の師たち、しかるべき所々には、このほどのご様子を、詳しく書いて遣わすのであろう。

入道の宮だけには、不思議にも生き返つた様子などをお書き申し上げなさる。二条院からの胸を打つ手紙のお返事には、すらすらと筆もお運びにならず、筆をうち置きうち置き、涙を拭いながらお書き申し上げになる様子、やはり格別である。

「繰り返し繰り返し、恐ろしい目の極限を体験し尽くした状態なので、今は俗世を離れたいという気持ちだけが募つていますが、鏡を見ても」とお詠みになつた面影が離れる間がないので、このように遠く離れたまま出来ようかと思うと、たくさんのさまざまな心配事は、二の次に自然と思われて、遠く遙かより思いやつております。知らない浦からさらに遠くの浦に流れ来ても、夢の中の心地ばかりして、まだ覚めきれないでいるうちは、どんなにか変なことを多く書いたことでしょう」

と、なるほど、とりとめもなくお書き散らしになっているが、まことに側からのぞき込みたくなるようなのを、「たいそう並々ならぬご寵愛のほどだ」と、供の人々は拝見する。

それぞれも、故郷に心細そうな言伝をしているようである。

絶え間なく降り続いた空模様も、すっかり晴れわたつて、漁をする海人たちも元気がよさそうである。須磨はとても心細く、海人の岩屋さえ数少なかったのに、人の多い嫌悪感はなさつたものの、ここはまた一方で、格別にしみじみと心を打つことが多くて、何かにつけて自然と慰められるのであつた。

「第三段 明石の入道とその娘」

明石の入道、その勤行の態度は、たいそう悟り澄ましているが、ただその娘一人を心配している様子は、とても側で見ているのも気の毒なくらいに、時々愚痴をこぼし申し上げる。ご心中にも、興味をお持ちになつた女な

ので、「このように意外にも廻り合わせなされたのも、そうなるはずの前世からの宿縁があるのか」とお思いになるものの、「やはり、このように身を沈めている間は、勤行より他のことは考えまい。都の人も、普通の場合以上に、約束したと違つとお思いになるのも、気恥ずかしい」と思われなさると、素振りをお見せになることはない。折にふれて、「氣立てや、容姿など、並み大抵ではないのかなあ」と、心惹かれなないでもない。

こちらでは「遠慮申し上げて、自身はめつたに参上せず、離れた下屋に控えている。その実、毎日お世話申し上げたく思い、物足りなくお思い申して、「何とか願いを叶えたい」と、仏、神をますますお祈り申し上げる。

年齢は六十歳くらいになっているが、とてもこざつぱりとしていかにも好ましく、勤行のために瘦せぎみになって、人品が高いせいであるうか、頑固で老いぼれたところはあがあるが、故事をもよく知つていて、どことなく上品で、趣味のよいところもまじつていたので、古い話などをさせてお聞きになると、少しは所在なさも紛れるのであつた。

ここ数年来、公私にお忙しくて、こんなに聞きになったことのない世の中の故事来歴を少しずつ説きおこすので、「このような土地や人をも、知らなかつたら、残念なことであつたらう」とまで、おもしろいとお思いになることもある。

このようにお親しみ申し上げてはいるが、たいそう氣高く立派なご様子に、そうはいつたものの、遠慮されて、自分の思うことは思うようにもお話し申し上げることができないので、「氣がせてならぬ、残念だ」と、母君と話して嘆く。

「ご本人は、普通の身分の男性でさえ、まあまあの人は見当たらないこの田舎に、世の中にはこのような方もいらつしやるのだ」と拝見したのにつけても、わが身のほどが思い知らされて、とても及びがたくお思い申し上げるのであつた。両親がこのように事を進めているのを聞くにも、「不釣り合いなことだわ」と思つと、何でもなかつた時よりもかえつて物思いがまさるのであつた。

「第四段 夏四月となる」

四月になった。衣更えのご装束、御帳台の帷子など、風流な様に作つて調進しながら、万事にわたつてお世話申し上げるのを、「氣の毒でもあり、これほどしてくれなくてもよいものを」とお思いになるが、人柄がどこまでも氣位を高くもつて上品なので、そのままになさつていらつしやる。

京からも、ひつきりなしにお見舞いの手紙が、つぎつぎと多かつた。のんびりとした夕月夜の晩に、海上に雲もなくはるかに見渡されるのが、お住みなれたお邸の池の水のように、思わず見間違えられなさると、何とも言いようなく恋しい氣持ちは、どこへともなくさすらつて行く氣がなさつて、ただ目の前に見やられるのは、淡路島なのであつた。

「ああ、と遙かに」などとおつしやつて、
「ああと、しみじみ眺める淡路島の悲しい情趣まで すつかり照らします今宵の月であることよ」

長いこと手をお触れにならなかつた琴を、袋からお取り出しになつて、ほんのちよつとお掻き鳴らしになつて、「ご様子」を、押し上げる人々も心が動いて、しみじみと悲しく思い合つてゐる。

「広陵」という曲を、秘術の限りを尽くして一心に弾いていらつしやるのと、あの岡辺の家でも、松風の音や波の音に響き合つて、音楽に嗜みのある若い女房たちは身にしみて感じてゐるようである。何の樂の音とも聞き分けることのできそうにないあちこちの山賤どもも、そわそわと浜辺に浮かれ出て、風邪をひくありさまである。

「第五段 源氏、入道と琴を合奏」

入道もじつとしていられず、供養法を怠つて、急いで参上した。

「まつたく、一度捨て去つた俗世も改めて思い出されそうでございます。来世に願つております極樂の有様も、かくやと想像される今宵の、妙なる笛の音でございますね」

と感涙にむせんで、お褒め申し上げます。

「ご自身でも、四季折々の管弦の御遊、その人あの人、の琴や笛の音、または声の出し具合、その時々々の催しにおいて絶賛されなかつた様子、帝をはじめたてまつり、多くの方々が大切に敬い申し上げなされたことを、他人

の身の上もご自身の様子も、お思い出しになられて、夢のような気がなさるまに、掻き鳴らしなさっている琴の音も、寂寞として聞こえる。

老人は涙も止めることができず、岡辺の家に、琵琶、箏の琴を取りにやつて、入道は、琵琶法師になって、たいそう興味ある珍しい曲を一つ二つ弾き出した。

箏の琴をお進め申したところ、少しお弾きになるのも、さまざまな方面にも、たいそうご堪能だとばかり感じ入り申し上げた。実際には、さほどだと思えない楽の音でさえ、その状況によって引き立つものであるが、広々と何物もない海辺である上に、かえって、春秋の花や紅葉の盛りである時よりも、ただ何ということなく青々と繁っている木蔭が、美しい感じがするので、水鶏が鳴いているのは、「誰が門さして」と、しみじみと興味が催される。

音色もまこと二つとなくくらい素晴らしく出す二つの琴を、たいそう優しく弾き鳴らしたのも、感心なさって、

「この琴は、女性が優しい姿態でくつろいだ感じに弾いたのが、おもしろいですね」

と、何気なくおっしゃるのを、入道はわけもなく微笑んで、

「お弾きあそばす以上に優しい姿態の人は、どこにございましょうか。わたくしは、延喜の帝のご奏法から弾き伝えること、四代になるのでございませぬが、このようにぶがいない身の上で、この世のことは捨て忘れておりました、ひどく気の滅入ります時々は、掻き鳴らしておりましたが、不思議にも、それを見よう見真似で弾く者がありまして、自然とあの先大王のご奏法に似ているのでございます。山伏のようなひが耳では、松風をその音を妙なる音と聞き誤つたのでございませうか。何とかして、それも一度ごっそりとお耳にお入れ申し上げたいものです」

と申し上げるにつれて、身をふるわして、涙を落としているようである。

君は、
「琴など、琴とお聞きになるなすの名人揃いの所で、悔しいことをしたなあ」

と言つて、押しやりなされて、

「不思議なことに、昔から箏は、女が習得するものであった。嵯峨の帝のご

伝授で、女五の宮が、その当時の名人でいらつしやつたが、その御系統で、格別に伝授する人はいません。総じて、ただ現在に著名な人々は、通り一遍の自己満足程度に過ぎないが、ここにそのように隠れて伝えていらつしやるとは、実に興味深いものですね。ぜひとも、聴いてみたいものです」

とおっしゃる。

「お聴きあそばすについては、何の支障がございませう。御前にお召しになつても。商人の中でさえ、古曲を賞美した人も、ございました。琵琶は、本当の音色を弾きこなす人、昔も少のうございましたが、少しも滞ることない優しい弾き方など、格別でございます。どのように習得したものでございませう。荒い波の音と一緒にするのは、悲しく存じられませんが、積もる愁え、慰められる折々もございます」

などと風流がつているので、おもしろいとお思ひになつて、箏の琴を取り替えてお与えになつた。

なるほど、たいそう上手に掻き鳴らした。現在では知られていない奏法を身につけていて、手さばきもたいそう唐風で、揺の音が深く澄んで聞こえた。「伊勢の海」ではないが、「清い渚で貝を拾おう」などと、声の美しい人に歌わせて、自分でも時々拍子をとつて、お声を添えなざるのを、琴の手を度々弾きやめて、お褒め申し上げる。お菓子など、珍しいさまに盛つて差し上げ、供の人々に酒を大いに勧めたりして、いつしか物憂さも忘れてしまふような夜の様子である。

「第六段 入道の問はず語り」

たいそう更けて行くにつれて、浜風が涼しくなつてきて、月も入り方になるにつれて、ますます澄みきつて、静かになつた時分に、お話を残らず申し上げて、この浦に住み初めたころの心づもりや、来世を願う模様など、ぼつりぼつりお話し申して、自分の娘の様子を、問はず語りに申し上げる。おかしくおもしろいと聞く一面で、やはりしみじみ不憫なお聞きになる点もある。

「とても取り立てては申し上げにくいことですが、あなた様が、このような思いがけない土地に、一時的にせよ、移つていらつしやいました

ことは、もはや、長年この老法師めがお祈り申していました神仏がお憐れみになって、しばらくの間、あなた様に「心労をお掛け申し上げることに
なつたのではないかと存ぜられます。

そのわけは、住吉の神を「祈願申し始めて、二十八年になりました。娘
がほんの幼少でございました時から、思う子細がございまして、毎年の春
秋ごとに、必ずあの住吉の御社に参詣することに致しております。昼夜の
六時の勤行に、自分自身の極楽往生の願いは、それはそれとして、ただ自
分の娘に高い望みを叶えてくださいと、祈っております。

前世からの宿縁に恵まれませんもので、このようになつたらない下賤な者
になつてしまつたのでございますが、父親は、大臣の位を保つておられま
した。自分からこのような田舎の民となつてしまつたのでございます。子々
孫々と、落ちぶれる一方では、終いにはどのようになつてしまふのかと悲
しく思つておりますが、わが娘は生まれた時から頼もしく思うところがご
ざいます。何とかして都の高貴な方に差し上げたいと思つ決心、固いもの
ですから、身分が低ければ低いなりに、多数の人々の嫉妬を受け、わたし
にとつてもつらい目に遭つ折々多くございましたが、少しも苦しみとは思つ
ておりません。自分が生きておりますうちは微力ながら育てましよう。こ
のまま先立つてしまつたら、海の中にも身を投げてしまいなさい、と申
しつけております」

などと、全部はお話できそうにもないことを、泣く泣く申し上げる。
君も、いろいろと物思いに沈んでいらつしやる時なので、涙ぐみながら
聞いていらつしやる。

「無実の罪に当たつて、思いもよらない地方にさすらうのも、何の罪による
のかと分からなく思つていたが、今夜のお話をうかがつて考え合せてみ
ると、なるほど浅くはない前世からの宿縁であつたのだと、しみじみと分
かつた。どうして、このようにはつきりとご存じであつたことを、今まで
お話してくださらなかつたのか。都を離れた時から、世の無常に嫌気がさ
し、勤行以外のことはせずに月日を送つていこううちに、すっかり意気地が
なくなつてしまつた。そのような人がいらつしやるのは、ほのかに聞いて
はいたが、役立たずの者では縁起でもなく思つて相手になさらぬであら
うと、自信をなくしていたが、それでは「案内してくださる」というのだね

心細い独り寝の慰めにも」

などとおつしやるのを、この上なく光榮に思つた。

「独り寝はあなた様もお分かりになつたでしょうか 所在なく物思いに夜を
明かす明石の浦の心淋しさを まして長い年月ずつと願ひ続けてまいつた
気のふさぎようを、お察しく下さいませ」

と申し上げる様子、身を震わせていたが、それでも気品は失っていない。
「それでも、海辺の生活に馴れた人は」とおつしやつて、

「旅の生活の寂しさに夜を明かしかねて 安らかな夢を見ることもありま
せん」

と、ちよつと寛いでいらつしやるご様子は、たいそう魅力的で、何ともい
いようのないお美しさである。数えきれないほどのことどもを申し上げた
が、何とも煩わしいことよ。誇張をまじえて書いたので、ますます、馬鹿
げて頑固な入道の性質も、現れてしまつたことである。

「第七段 明石の娘へ懸想文」

願ひが、まずまず叶つた心地がして、すがすがしい気持ちでいると、翌
日の昼頃に、岡辺の家にお手紙をおつかわしになる。奥ゆかしい方らしい
のも、かえつて、このような辺鄙な土地に、意外な素晴らしい人が埋もれ
ているようだ、お気づかないなつて、高麗の胡桃色の紙に、何ともいえ
ないくらい念入りに趣向を調べて、

「何もわからない土地にわびしい生活を送つていましたが お噂を耳にして
お便りを差し上げます」 思ふには「
というぐらゐあつたのであろうか。

入道も、こつそりとお待ち申し上げようとして、あちらの家に来ていた
のも期待どおりなので、御使者をたいそうおもはゆく思つほど酔わせる。

お返事には、たいそう時間がかかる。奥に入つて催促するが、娘は一向
に聞き入れない。気後れするようなお手紙の様子に、お返事をしたためる
筆跡も、恥ずかしく気後れして、相手のご身分と、わが身の程を思い比べ
ると、比較にもならない思いがして、気分が悪いといつて、物に寄り伏し
てしまつた。

説得に困つて、入道が書く。

「とても恐れ多い仰せ言は、田舎者には、身に余るほどのことだからでございませうか。まづたく拝見させて戴くことなど、思いも及ばぬもつたいなまでございます。それでも、物思ひされながら眺めていらつしやる空を同じく眺めていますのは、きつと同じ気持ちだからなのでしょう。と拝見してます。大変に色めいて恐縮でございます。」

と申し上げた。陸奥紙に、ひどく古風な書き方だが、筆跡はしゃれていた。なるほど、色つぼく書いたものだ」と、目を見張つて御覧になる。御使者に、並々ならぬ女装束などを与えた。

翌日、

「代筆のお手紙を頂戴したのは、初めてです」とあつて、悶々として心の中で悩んでおります。いかがですかと尋ねてくださる人もいないので、言ひがたみ。」

と、今度は、たいそうしなやかな薄様に、とても美しそつにお書きになっていた。若い女性が素晴らしいと思わなかつたら、あまりに引つ込み思案というものである。ご立派なとは思ふものの、比較にならないわが身の程が、ひどくふがないので、かえつて、自分のような女がいるということとを、お知りになり訪ねてくださるにつけて、自然と涙ぐまれて、まつたく例によつて動こうとしないのを、責められ促されて、深く染めた紫の紙に、墨つきも濃く薄く書き紛らわして、

「思つて下さるとおっしゃいますが、その真意はいかなものでしょうか。ただ見たこともない方が噂だけで悩むということがあるのでしょうか。」

筆跡や、出来ぐあいなど、高貴な婦人方に比べてもたいして見劣りがせず、貴婦人といった感じである。

京の事が思い出されて、興味深いと御覧になるが、続けざまに手紙を出すのも、人目が憚られるので、一、二日置きに、所在ない夕暮や、もしくはしみじみとした明け方などに紛らわして、それらの時々、同じ思いをしているにちがいない時を推量して、書き交わしなると、不似合ひではない。思慮深く気位高くかまえている様子も、是非とも会わないと気がすまない、お思いになる一方で、良清がわがもの顔に言つていた様子もしゃくにさわるし、長年心にかけていただるうことを、目の前で失望させるのも

気の毒にご思案されて、相手が進んで参つたような恰好ならば、そのようなことにして、うやむやのうちには事をなすべし」とお思いになるが、女は女で、かえつて高貴な身分の方以上に、たいそう気位高くかまえていて、いまいましく思つようにお仕向け申しているの、意地の張り合ひで日が過ぎて行つたのであつた。

京の事を、このように関よりも遠くに行つた今では、ますます気がかりにお思い申し上げなさつて、どうしたものだろう。冗談でないことだ。こつそりと、お迎え申してしまおうか」と、お気弱になられる時々もあるが、こつつかといつて、こつして何年も過せようかと、今さら体裁の悪いことを」とお思い静めになつた。

「第八段 都の天変地異」

その年、朝廷では、神仏のお告げが続いてあつて、物騒がしいことが多くあつた。三月十三日、雷が鳴りひらめき、雨風が激しかった夜に、帝の御夢に、院の帝が、御前の階段の下にお立ちあそばして、御機嫌がひどく悪くて、お睨み申し上げあそばすので、畏まつておいであそばす。お申し上げあそばすこと多かつた。源氏のお身の上の事であつたのだろう。

たいそう恐ろしく、またおいたわしく思ひ召して、太后にお申し上げあそばしたのだが、

「雨などが降り、天候が荒れている夜には、思い込んでいることが夢に現れるのでございます。軽々しい態度に、お驚きあそばすものではありません。」とお諫めになる。

お睨みになつたとき、眼をお見合わせになつたと申し召してか、眼病をお患になつて、堪えきれないほどお苦しみになる。御物忌み、宮中でも太后宮でも、数知れずお執り行わせあそばす。

太政大臣がお亡くなりになつた。無理もないお年であるが、次々に自然と騒がしいことが起つて来る上に、太后宮もどこごとくお具合が悪くなつて、日がたつにつれ弱つて行くようなので、主上におかれてもお嘆きになること、あれやこれやと尽きない。

やはり、この源氏の君が、真実に無実の罪でこのように沈んでいるなら

ば、必ずその報いがあるだろうと思われます。今は、やはり元の位階を授けよう」

と度々お考えになり仰せになるが、

「世間の非難、軽々しいようでしょう。罪を恐れて都を去つた人を、わずか三年も過ぎないうちに赦されるようなことは、世間の人もどのように言い伝えることでしょうか」

などと、大后は固くお諫めになるので、ためらうていらつしやるうちに月日がたつて、お二方の御病氣も、それぞれ次第に重くなつて行かれる。

第三章 明石の君の物語 結婚の喜びと嘆きの物語

「第一段 明石の侘び住まい」

明石では、例によつて、秋、浜風が格別で、独り寝も本当に何となく淋しくて、入道にも時々話をおもちかけになる。

「何とか人目に立たないようにして、こちらに差し向けなさい」

とおつしやつて、いらつしやることは決してないようにお思いになつてゐるが、娘は娘でまた、まったく出向く気などない。

「とても取るに足りない身分の田舎者は、一時的に下向した人の甘い言葉に乗つて、そのように軽く良い仲になることもあるが、一人前の夫人として思つてくだらないだろうから、わたしはたいへんつらい物思ひの種を増すことだろう。あのように及びもつかぬ高望みをしている両親も、未婚の間で過ごしているうちは、当てにならないことを当てにして、将来に希望をかけていようが、かえつて心配が増ることである」と思つて、ただこの浦にいらつしやる間は、このようなお手紙だけをやりとりさせていただけののは、並々ならぬこと。長年噂にだけ聞いて、いつの日にかそのよくな方のご様子をちらつとも拝見しようなどと、思いもしなかつたお住まいで、よそながらもちらと拝見し、世にも素晴らしいと聞き伝えていたお琴の音をも風に乗せて聴き、毎日のお暮らしぶりもはつきりと見聞きし、このようにまでわたしに対してご関心いただくのは、このような海人の中

に混じつて朽ち果てた身にとつては、過分の幸せだわ」

などと思つと、ますます氣後れがして、少しもお側近くに上がることはどは考えもしない。

両親は、長年の念願が今にも叶いそうに思いながら、

「不用意にお見せ申して、もし相手にもしてくださらなかつた時は、どんなに悲しい思いをするだろうか」

と想像すると、心配でたまらず、

「立派な方とは申しても、辛く堪らないことであるよ。目に見えない仏、神を信じ申して、君のお心や、娘の運命をも分らないままに」

などと、改めて思い悩んでいた。君は、

「この頃の波の音に合せて、あの琴の音色を聴きたいものだ。それでなかつたら、何にもならない」

などと、いつもおつしやる。

「第二段 明石の君を初めて訪ねる」

こつそりと吉日を調べて、母君があれこれと心配するには耳もかさず、弟子たちにさえ知らせず、自分の一存で世話をやき、輝くばかりに整えて、十三日の月の明るくさした時分に、ただ、あたら夜の」と申し上げた。

君は、「風流ぶつてゐるな」とお思いになるが、お直衣をお召しになり身なりを整えて、夜が更けるのを待つてお出かけになる。お車はまたとなく立派に整えたが、仰々しいと考へて、お馬でお出かけになる。惟光などばかりをお従わせになる。少し遠く奥まつた所であつた。道すがら、四方の浦々をお見渡しになつて、恋人どうしで眺めたい入江の月影を見るにつけても、まずは恋しい人の御ことをお思い出し申さずにはいらつしやれないので、そのまま馬で通り過ぎて、上京してしまいたく思われなさる。

「秋の夜の月毛の駒よ、わが恋する都へ天翔つておくれ 東の間でもあの人に会いたいのぞ」

とつい独り口をついて出る。

造りざまは、木が深く繁つて、ひどく感心する所があつて、結構な住まいである。海辺の住まいは堂々として興趣に富み、こちらの家はひっそり

とした住まいの様子で、「ここで暮らしたら、どんな物思いもし残すことはなかるう」と自然と想像されて、しみじみとした思いにかられる。三味堂が近くにあつて、鐘の音、松風に響き合つて、もの悲しく、巖に生えている松の根ざしも、情趣ある様子である。いくつもの前栽に虫が声いつぱいに鳴いている。あちらこちらの様子を御覧になる。娘を住ませている建物は、格別に美しくあつて、月の光を入れた真木の戸口は、ほんの気持ちばかり開けてある。

少しためらいがちに、何かと言葉をおかけになるが、「こんなにまでお側近くには上がるまい」と深く決心していたので、何となく悲しくて、気を許さない態度を、「ずいぶんと貴婦人ぶつてゐるな。容易に近づきたい高貴な身分の女でさえ、これほど近づき言葉をかけてしまえば、気強く拒むことはないのであつたが、このように落ちぶれてゐるので、見くびつてゐるのだろうか」としゃくで、いろいろと悩んでゐるようである。「容赦なく無理じいするのも、意向に背くことになる。根比べに負けたりしたら、体裁の悪いことだ」などと、千々に心乱れてお恨みになる様子、本当に物の情趣を理解する人に見せたいものである。

近くの几帳の紐に触れて、箏の琴が音をたてたのも、感じが取り纏つてなく、くつろいだ普段のまま琴を弄んでいた様子が想像されて、興味あるので、

「この、噂に聞いていた琴までも聴かせてくれないのですか」
などと、いろいろとおっしゃる。

「睦言を語り合える相手が欲しいものです。この辛い世の夢がいくらかでも覚めやしないかと」

「闇の夜にそのまま迷つておりますわたしには、どちらが夢か現実か区別してお話し相手になれましよう」

かすかな感じは、伊勢の御息所にとてもよく似ていた。何も知らずにくつろいでいたところを、こう意外なお出ましとなつたので、たいそう困つて、近くにある曹司の中に入って、どのように戸締りしたものか、固いのだが、無理して開けようとはなさらない様子である。けれども、いつまでもそうしてばかりいられようか。

人柄は、とても上品で、すらりとして、気後れするような感じがする。こ

のような無理に結んだ契りをお思いになるにつけても、ひとしおいと思いが増すのである。情愛が、逢つてますます思いが募るのであろう、いつもは嫌でたまらない秋の夜の長さも、すぐに明けてしまった気持ちがあるのので、「人に知られまい」とお思いになると、気がせかれて、心をこめたお言葉を残して、お立ちになった。

後朝のお手紙、こつそりと今日はある。つまらない良心の呵責であるよ。こちらでも、このようなことを何とか世間に知られまいと隠して、御使者を仰々しくもてなさないのを、残念に思つた。

こつして後は、こつそりと時々お通いになる。「距離も少し離れてゐるので、自然と口さがない海人の子どもがいるかも知れない」とおためらいになる途絶えを、「やはり、思つていたとおりだわ」と嘆いてゐるので、「なるほど、どうなることやら」と、入道も極楽往生の願いも忘れて、ただ君のお通いを待つことばかりである。今さら心を乱すのも、とても気の毒なことである。

「第三段 紫の君に手紙」

二条院の君が、風の便りにも漏れお聞きなさるようなことは、「冗談にもせよ、隠しだてをしたのだと、お疎み申されるのは、申し訳なくも恥ずかしいことだ」とお思いになるのも、あまりな「愛情の深さ」というものである。「こつこつ方面のことは、穏和な方とはいへ、気になさつてお恨みになつた折々、どうして、つまらない忍び歩きにつけても、そのようなつらい思いをおさせ申したのだろうか」などと、昔を今に取り戻したく、女の有様を御覧になるにつけても、恋しく思う気持ちが慰めようがないので、いつもよりお手紙を心こめてお書きになつて、

「こつこつで、こつこつと、自分ながら心にもない出来心を起こして、お恨まれ申した時々のことを、思い出すのさえ胸が痛くなりますのに、またしても変なつまらない夢を見たのです。このように申し上げます問はず語りに、隠しだてしない胸の中だけは「ご理解ください。誓ひしことも」「などと書いて、

何事につけても、あなたのことが思い出されて、さめざめと泣けてしま

ます かりそめの恋は海人のわたしの遊び事ですけれども」

とあるお返事、何のこだわりもなくかわいらしげに書いて、

「隠しきれずに打ち明けてくださつた夢のお話につけても、思い当たること
が多くございますが、固い約束をしましたので、何の疑いもなく信じてお
りました 末の松山のように、心変わりはないものと」

鷹揚な書きぶりながら、お恨みをこめてほめかしていらつしやるのを、
とてもしみじみと思われ、下に置くこともできず御覧になって、その後は、
久しい間忍びのお通いもなさらぬ。

「第四段 明石の君の嘆き」

女は、予想通りの結果になつたので、今こそほんとうに身を海に投げ入
れてしまいたい心地がする。

「老い先短い両親だけを頼りにして、いつになつたら人並みの境遇になれる
身の上とは思っていなかったが、ただとりとめもなく過ごしてきた年月の
間は、何事に心を悩ましたろうか、このようにひどく物思いのする結婚生
活であつたのだ」

と、以前から想像していた以上に、何事につけ悲しいけれど、穏やかに
振る舞つて、憎らしげのない態度でお会い申し上げる。

いとしいと月日がたつにつれてますますお思いになつていくが、れつき
とした方が、いつかいつかと帰りを待つて年月を送つていられるのが、一
方ならずご心配なさつていらつしやるだろつことが、とても気の毒なので、
独り寝がちにお過ごしになる。

絵をいろいろとお描きになつて、思うことを書きつけて、返歌を聞かれ
るようになつた趣向にお作りなつた。見る人の心にしみ入るような絵の様
子である。どうして、お心が通じあつているのであるうか、二条院の君も、
悲しい気持ちがかかることなくお思いになる時々は、同じように絵をたく
さんお描きになつて、そのままご自分の有様を、日記のようにお書きになつ
ていた。どうなつて行かれるお二方の身の上であるうか。

第四章 明石の君の物語 明石の浦の別れの秋の物語

「第一段 七月二十日過ぎ、帰京の宣言下る」

年が変わつた。主上におかせられては御不例のことがあつて、世の中
はいろいろと取り沙汰する。今上の御子は、右大臣の娘で、承香殿の女御
がお生みになつた男御子がいらつしやるが、二歳におなりなので、たいそ
う幼い。東宮に御譲位申されることであるう。朝廷の御後見をし、政權を
担当すべき人をお考え廻らすと、この源氏の君がこのように沈んでいらつ
しやること、まことに惜しく不都合なことなので、ついに皇太后の御諫言
にも背いて、御赦免になられる評定が下された。

去年から、皇太后も御物の怪をお悩みになり、さまざまな前兆ががしき
りにあり、世間も騒がしいので、嚴重な御物忌みなどをなさつた効果があつ
てか、悪くなくおいであそばした御眼病までもが、この頃重くおなりあそ
ばして、何となく心細く思はずにはいらつしやれなかつたので、七月二十
日過ぎに、再度重ねて、帰京なさるよう宣言が下る。

いつかはこうなることと思つていたが、世の中の定めないことにつけて
も、どういふことになつてしまつたろうか」とお嘆きになるが、このよ
うに急なので、嬉しいと思つともにも、また一方で、この浦を今を限りと
離れることをお嘆き悲しみになるが、入道は、当然そうなることとは思
いながら、聞くなり胸のつぶれる気持ちがあるが、思い通りにお栄えになつ
てこそ、自分の願いも叶うことなのだ」などと、思い直す。

「第二段 明石の君の懐妊」

そのころは、毎夜お通いになつてお語りになる。六月頃から懐妊の兆
候が現れて苦しんでいたのであつた。このようにお別れなさらねばならぬ
い時なので、あいにくご愛情もいや増すといつのであるうか、以前よりも
いとしくお思いになつて、不思議と物思ひせずにはいられない、わが身で
あることよ」とお悩みになる。

女は、さらにいうまでもなく思い沈んでゐる。まことに無理もないことであるよ。思いもかけない悲しい旅路にお立ちになったが、けつきよくは帰京するであろう」と、一方ではお慰めになつてゐた。

今度は嬉しい都への「ご出発であるが、二度とここに来るようなことはあるまい」とお慰めになると、しみじみと感慨無量である。

お供の人々は、それぞれ身分に応じて喜んでゐる。京からもお迎えに人々が参り、愉快そうにしているが、主人の入道、涙にくれてゐるうちに、月が替わつた。

季節までもしみじみとした空の様子なので、どうして、自分から求めて今も昔も、埒もない恋のために憂き身をやつすのだらう」と、さまざまにお思い悩んでいられるのを、事情を知つてゐる人々は、

「ああ、困つた方だ。いつものお癖だ」

と拝、思ま思ましがつてゐるようである。

「ここ数月来、全然、誰にもそぶりもお見せにならず、時々人目を忍んでお通いになつていらつしやうた冷淡さだつたのに」

「最近、あいにくと、かえつて、女が嘆きを増すことであるうに」

と、互いに陰口をたたき合う。源少納言は、ご紹介申した当初の頃のことなどを、ささやき合つてゐるのを、おもしろからず思つてゐた。

「第三段 離別間近の日」

明後日ほどになつて、いつものようにあまり夜が更けないうちにお越しになつた。まだはつきりと御覽になつていない容貌などを、とても風情があり、気高い様子をしていて、目を見張るような美しさだ」と、見捨てにくく残念にお思いになる。しかるべき手筈を整えて迎えよう」とお考えになつた。そのように約束してお慰めになる。

男のお顔たち、お姿は、改めていうまでもない。長い間の「勤行にひどく面瘦せなさつていらつしやるのが、いいようもなく立派なご様子で、痛々しいご様子に涙ぐみながら、しみじみと固いお約束なさるのは、ただ一時の逢瀬でも、幸せと思つて、諦めてもいいではないか」とまで思われもするが、ご立派さにつけて、わが身のほどを思うと、悲しみは尽きない。波

の音、秋の風の中では、やはり響きは格別である。塩焼く煙が、かすかにたなびいて、何もかもが悲しい所の様子である。

「今はいつたんお別れしますが、藻塩焼く煙のように、上京したら一緒に暮らしましょう」

とお詠みになると、

「何とも悲しい気持ちでいっぱいですが、今は申しても甲斐のないことですから、お恨みはいたしません」

せつなげに涙ぐんで、言葉少なではあるが、しかるべきお返事などは心をこめて申し上げる。あの、いつもお聴きになりたがつていらした琴の音色など、まうたかお聴かせ申さなかつたのを、たいそうお恨みになる。

「それでは、形見として思い出になるよう、せめて一節だけでも」

とおつしやつて、京から持つていらした琴のお琴を取りにやつて、格別に風情のある一曲をかすかに掻き鳴らしていらつしやる、夜更けの澄んだ音色は、たとえようもなく素晴らしい。

入道も、たまりかねて箏の琴を取つて差し入れた。娘自身も、ますます涙まで催されて、止めようもないので、気持ちこそそれらるのであるう、ひっそりと音色を調べた具合、まことに気品のある奏法である。入道の宮のお琴の音色を、今の世に類のないものとお思い申し上げてゐたのは、当世風で、ああ、素晴らしい」と、聴く人の心がほればれとして、御器量までが自然と想像されることは、なるほど、まことにこの上ないお琴の音色である。これはどこまでも冴えた音色で、奥ゆかしく憎らしいほどの音色が優れていた。この君でさえ、初めてしみじみと心惹きつけられる感じで、まだお聴きつけにならない曲などを、もつと聴いていたいと感じさせる程度に、弾き止め弾き止めして、物足りなくお思いになるにつけても、いく月も、どうして無理してでも、聴き親しまなかつたのだらう」と、残念にお思いになる。心をこめて将来のお約束をなさるばかりである。

「琴は、再び掻き合わせをするまでの形見に」

とおつしやる。女、

「軽にお気持ちでおつしやるお言葉でしょうが、その一言を悲しくて泣きながら心にかけて、お惚び申します」

と言うともなく口ずさみなさるのを、お恨みになつて、

「今度逢う時までの形見に残した琴の中の緒の調子のように二人の仲の愛情も、格別変わらないうちでいて欲しいものです。この琴の絃の調子が狂わないうちに必ず逢いましょう。」

とお約束なさるようである。それでも、ただ別れる時のつらさを思つてむせび泣いているのも、まことに無理はない。

「第四段 離別の朝」

「ご出立になる朝は、まだ夜の深いうちにお出になつて、お迎えの人々も騒がしいので、心も上の空であるが、人のいない隙間を見はからつて、

「あなたを置いて明石の浦を旅立つわたしも悲しい氣がしますが、後に残つたあなたはさぞやどのような氣持ちでいられるかお察しします。」

お返事は、

「長年住みなれたこの苦屋も、あなた様が立ち去つた後は荒れはてて、つらい思いをしましょうから、いつそ打ち返す波に身を投げてしまおうかしら」と、氣持のままなのを御覧になると、堪えていらつしやうたが、ほろほろと涙がこぼれてしまつた。事情を知らない人々は、

「やはりこのようなお住まいであるが、一年ほどもお住み馴れになつたので、いよいよ立ち去るとなると、悲しくお思いになるのももつともなことだ。」

などと、拝見する。
良清などは、並々ならずお思いでいらつしやるようだと、いままく思つている。

嬉しいにつけても、なるほど、今日限りで、この浦を去ることよ。」などと、名残を惜しみ合つて、口々に涙ぐんで挨拶をし合つていようだ。けれど、いちいちお話する必要もあるまい。

入道、今日のお支度を、たいそう盛大に用意した。お供の人々、下々のままで、旅の装束を立派に整えてある。いつの間にかこんなに準備したのだからかと思われた。ご装束はいうまでもない。御衣櫃を幾棹となく荷なわせお供をさせる。実に都への土産にできるお贈り物類、立派な物で、氣のつかないところが無い。今日お召しになるはずの狩衣のご装束に、

「ご用意致しました旅のご装束は寄る波の涙に濡れていまだで、嫌だとお

思ひになりましょうか」

とあるのを御発見なさつて、騒がしい最中であるが、

「お互いに形見として着物を交換しましょう。また逢える日までの間の二人の仲の、この中の衣を。」

とおつしやうて、「せうかくの好意だから」と言つて、お召し替えになる。お身につけていらしたのをお遣わしになる。なるほど、もう一つお憫びになるよすがを添えた形見のようである。素晴らしいお召し物に移り香が匂つているのを、どうして相手の心にも染みないことがあるうか。

入道は、

「きうぱりと世を捨てました出家の身ですが、今日のお見送りにお供申しませんことが。」

などと申し上げて、べそをかいているのも氣の毒だが、若い人ならきつと笑つてしまつてあるう。

「世の中が嫌になつて長年この海浜の汐風に吹かれて暮らして来たが、なお依然として子の故に此岸を離れることができません。娘を思う親の心は、ますます迷つてしまいそうです。せめて国境までなりとも」と申し上げて、

「あだめいた事を申すようでございますが、もしお思い出しあそばすことがございましたら。」

などと、ご内意を頂戴する。たいそう氣の毒にお思ひになつて、お顔の所々を赤くしていらつしやるお目もとのあたりがなどが、何ともいいようなくお見えになる。

「放つておききたい事情もあるので、きつと今すぐにお思ひ直しくたさるでしよう。ただ、この住まいが見捨てがたいのです。どうしたものでしょう」とおつしやうて、

「都を立ち去つたあの春の悲しさに決して劣るうか。年月を過してきたこの浦を離れる悲しい秋は」とお詠みになつて、涙を拭つていらつしやると、ますます分別を失つて、涙をさらに流す。立居もままならず転びそつになる。

「第五段 残された明石の君の嘆き」

娘ご本人の気持ちは、たとえようもないくらいで、こんなに深く悲嘆しているに誰にも見せまいと気持を沈めていたが、わが身のつたなさがもとで、無理のないことであるが、お残しになって行かれた恨みの晴らしようがないが、せいぜいできることは、ただ涙に沈むばかりである。母君も慰めるのに困って、

「どうして、こんなに気を揉むようなことを思いついたのでしょうか。あれもこれも、偏屈な主人に従ったわたしの失敗でした」

と言う。

「まあ、静かに。お捨て置きになれない事情もありになるようですから、今は別れたといつても、お考えになつてゐることがございましょう。気持を落ち着かせて、せめてお薬湯などでも召し上げね。ああ、縁起でもない」と言つて、片隅に座つていた。乳母、母君などは、偏屈な心をそしり合ひながら、

「早く早く、何とか願ひ通りにお世話申そうと、長い年月を期待して過ごしてき、今や、その願ひが叶つたと頼もしくお思ひ申したのに、気の毒にも、事の初めから味わおうとは」

と嘆くのを見るにつけても、かわいそうなので、ますます頭がぼんやりしてきて、昼は一日中、寝てばかり暮らし、夜はすつくと起き出して、数珠の在りかも分からなくなつてしまつた」と言つて、手をすり合わせさせて茫然としていた。

弟子たちに軽蔑されて、月夜に庭先に出て行道をしたにはしたのだが、遣水の中に落ち込んだりするのであつた。風流な岩の突き出た角に腰をぶつつけて怪我をして、寝込むことになつてようやく、物思いも少し紛れるのであつた。

第五章 光る源氏の物語 帰京と政界復帰の物語

「第一段 難波の御被い」

君は、難波の方面に渡つてお被いをなさつて、住吉の神にも、お蔭で無

事であつたので、改めていろいろと願ほごき申し上げる旨を、お使いの者に申させなさる。急に大勢の供回りとなつたので、ご自身は今回はお参りするにおおできになれず、格別のご遊覧などもなくて、急いで京にお入りになつた。

二条院にお着きあそばして、都の人も、お供の人も、夢のような心地がして再会し、喜んで泣くのも縁起が悪いくらいまで大騒した。

女君も、生きていても甲斐ないとまでお思ひ棄てていた命、嬉しくお思ひのことであるう。とても美しく成人なさつて、ご苦労の間に、うるさいほどあつたお髪が少し減つたのも、かえつてたいそう素晴らしいのを、今はもうこうして毎日お会いできるのだ」と、お心が落ち着くにつけて、また一方では、心残りの別れをしてきた人が悲しんでいた様子、痛々しくお思ひやらずにはいられない。やはり、いつになつてもこのような方面では、お心の休まる時のないことよ。

その女のことなどをお話し申し上げなさつた。お思ひ出しになるご様子が一通りのお気持ちでなく見えるので、並々のご愛着ではないと拝見するのであるうか、さりげなく、わたしの身の上は思ひませんが「などと、ちらつと嫉妬なさるのが、しゃれていていらしいとお思ひ申し上げなさる。また一方で、見ていてさえ見飽きることはないご様子を、どうして長い年月会わずにいられたのだろうか」と、信じられないまでの気持がするの、今さらながら、まことに世の中が恨めしく思われる。

まもなく、元のお位に復して、員外の権大納言におなりになる。以下の人々も、しかるべき者は皆元の官を返し賜わり、世に復帰するのは、枯れていた木が春にめぐりあつた有様で、たいそうめでたい感じである。

「第二段 源氏、参内」

お召しがあつて、参内なさる。御前に伺候していられると、いよいよ立派になられて、どうしてあのような辺鄙な土地で、長年お暮らになつたのだらう」と拝見する。女房などの中で、故院の御在世中にお仕えして、年老いた連中は、悲しくて、今さらのように泣き騒いでお褒め申し上げる。

主上も、恥ずかしくまでお思召されて、御装束なども格別におつくり

になつてお出ましになる。お加減が、すぐれない状態で、ここ数日おいであそばしたので、ひどくお弱りあそばしていらつしやつたが、昨日今日は、少しよろしくお感じになるのであつた。お話をしみじみとなさつて、夜に入つた。

十五夜の月が美しく静かなので、昔のことを、一つ一つ自然とお思ひ出しになられて、お泣きあそばす。何となく心細くお思ひあそばさずにはいられないのであろう。

「管弦の催しなどもせず、昔聞いた楽の音なども聞かないで、久しくなつてしまつたな」

と仰せになるので、

「海浜でうちしおれて落ちぶれながら蛭子のように立つこともできず三年を過ごして来ました」

とお応え申し上げなされた。とても胸をうち心恥しく思はずにはいらつしやれないで、

「こうしてめぐり会える時があつたのだから、あの別れた春の恨みはもう忘れてください」

実に優美な御様子である。

故院の御追善供養のために、法華御八講を催しなされることを、何より先にご準備させなされる。東宮にお目にかかりなされると、すっかりと御成人あそばして、珍しくお喜びになつてゐるのを、感慨無量のお気持ちで拝しなされる。御学問もこの上なくご上達になつて、天下をお治めあそばすにも、何の心配もいらぬように、ご立派にお見えあそばす。

入道の宮にも、お心が少し落ち着いて、ご対面の折には、しみじみとしたお話がきつとあつたであらう。

「第三段 明石の君への手紙、他」

そつそつ、あの明石には、送つて来た者たちの帰りにことづけて、お手紙をお遣はしになる。人目に立たないようにして情愛こまやかにお書きになるようである。

「波の寄せる夜々は、どのようになつて、お嘆きになりながら暮らしていらつしや

る明石の浦に、嘆きの息が朝霧となつて立ちこめてゐるのではないかと想像してゐます」

あの大宰帥の娘の五節は、どうにもならないことだが、人知れずご好意をお寄せ申してゐたのもさめてしまつた感じがして、目くばせさせて置いて行かせたのであつた。

「須磨の浦で好意をお寄せ申した舟人が、そのまま涙で朽ちさせてしまつた袖をお見せ申しとつごさいます」

「筆跡などもたいそう上手になつたな」と、お見抜きになつて、お遣わしになる。

「かえつてこちらこそ愚痴を言いたいくらいです、ご好意を寄せていただいて、それ以来涙に濡れて袖が乾かないものですから」

「いかにもかわいい」とお思ひになつた昔の思ひ出もあるのですが、はつとびつくりさせられなされて、ますますいとしくお思ひ出しになるが、最近は、そのようなお忍び歩きはまうたく慎んでいらつしやるようである。

花散里などにも、ただお手紙などはかりなので、心もとなく思われて、かえつて恨めしい様子である。

